

お　わ　り　に

研究主題「発達と障害に応じた教育をめざして」を設定し、研究に取り組んで2期7年間を経て、本年をもって一応の区切りをつけることになった。「発達と障害に応じた教育」は、心身障害児教育の共通課題であり、今後いかなる研究主題を設けようとも、すべての教育実践を帰結するものであり、教育目標を達成するための基本方針ともいえるであろう。また、副題「からだづくりを通して」を設定し、一人ひとりの子どもたちの全面的発達と社会参加の基礎づくりをめざして、4年間の研究と実践を行い研究紀要第13集としてまとめた。

本校の児童生徒は、精神的発達の遅れのみならず、何らかの身体的発達の遅れがみられる。精神と身体との発達は、相互作用や相補的關係にあり、切り離して考えることができない。このことは多くの研究実践事例が示している。少々の遅れやばらつきはあるが、暦年齢と共に発達する体格や性徴等に対し、体力や身体的運動面の諸機能、知的・心理的側面の諸機能の著しい遅れが見られる。実践事例はこのことを、障害そのものからの遅れ以上に、生育歴の中での体験不足が大きいことを指適している。すなわち、人間発達の土台を築くための、早期の「からだづくり」が一人ひとりの発達に応じて十分になされていないために、発達の遅れを更に大きくしているのではなからうか。

障害を持った児童生徒の体験不足はどこから来るのだろうか。障害そのものによって、主体的に、能動的に活動することには少からず制約はあろうが、多くは、彼等を取りまく人的環境が大きく作用しているのではなからうかと思われる。この子は障害児だからそんなことは「できない」「無理だ」「必要ない」といって、やろうとする意欲やしななければならない活動を奪い取ってはいないだろうか。飛躍のしすぎかも知れないが、ここら当りにも、社会一般の障害児に対する理解不足や誤った対応が大きく作用して、彼等の活動や体験の場を狭めているように思われてならない。我々教師にとって、障害児に対する社会への啓発は大きな課題である。

一方、学校として障害を持った児童生徒を受け入れた限り、発達の遅れを早く取り戻し、更なる発達の為に全力を尽さねばならない。学校教育は児童生徒の発達を促す最も重要な条件ではあるが、すべてではないということを実感しながらも、教師すべてが指導技術を磨き、児童生徒の自己活動を巧みに呼び起こし、これを方向づけ、主体的な発達を促進することにかかっている。4年間の研究は、重ねては崩し、崩しては積んで遅々たる歩みであったかも知れない。しかし、一人ひとりの教師は、児童生徒の発達と共に、障害児教育への見方や考え方、指導技術、教育観等を確認なものとしてきた。研究の成果は今後の教育課程全体に生かし、残された課題は次の研究に引き継ぎ、本校教育の進展を期するものである。

最後になりましたが、本研究にご指導、ご援助を賜りました関係各位に、同人一同、心から深く感謝を申し上げます。

(浜部 寿)